

【問題】（演習／共通問題）

出典：山極寿一『家族の起源』／東京都立大学 人文・法・経済学部 98年

文章略解

霊長類における人類の特殊性を分析する際に、食事に着目してみると面白い。霊長類一般と人類の食習慣を分ける違いは、人類が①食物をその場で食わずに持ち帰る、②集めた食物を一定の取り決めに従って分配する、③食事が社会交渉の機能を持つ、という三点に求められる。人間は霊長類の中では例外的に家族という社会単位で生活を営むため、こうした性質が生じたのであろう。したがって、人間家族の起源を分析することが肝要になる。

解答

問1 (ア) ㊦ 摂取 (イ) ㊦ 作法 (ウ) ㊦ 光景 (エ) ㊦ 投影 (オ) ㊦ 模索

問2 (a) ㊦ (ウ) (b) ㊦ (オ) (c) ㊦ (ウ) (d) ㊦ (イ) (e) ㊦ (オ)

問3 雑食性（5行目）

問4 他者と食事を共にするという行為が、お互いの社会関係を強化・確認したり認知したりする手助けとなること。〔50字・解答例〕

問5 一飯の恩義 ㊦ 食事を提供されるなどの、多少の世話になること。〔解答例〕

同じ釜の飯を食った仲Ⅱ一時期ともに生活し、苦楽を共にした間柄。〔解答例〕

問6 霊長類の進化の過程で、人間は家族という社会単位で一つの場所で共同生活を営むようになり、それとともに採食の分業化と家族での分配というシステムが確立したという理由。〔80字・解答例〕

問7
(ウ)

出典：小浜逸郎『なぜ人を殺してはいけないのか』／千葉大学 01年

文章略解

意味や目的の意識とは、ある行動や表現の外側に出てそれらを終局的見地からながめ、他の行動や表現に関連づけることである。しかし、人間は具体的な行動や表現だけでなく人生全体に対して意味や目的を求めるようになった。「人は何のために生きるのか」という問いはしかし、論理的に解答できない問いでもある。我々は人生の目的という問いかけを編みかえ、自分が充足した生を送るために、どうすべきかという問いを立てる必要がある。

解答

問1 (ア) 懸命 (イ) 飛躍 (ウ) 包括 (エ) 射程 (オ) 錯覚

問2 ① b ③ c ④ a

問3 (1) 短い、わずかな時間のこと。 (2) 冷笑主義 (3) 虚無主義 (4) 個人の利害や目先にとらわれないさま。

問4 自己意識を極端に発達させた〔13字〕(8行目)

問5 死

問6 人はどうすれば自分自身の生を充足させてくれる意味や目的を作り出すことができるか。(40字・解答例)

問1 漢字の書き取り問題。ふだん何げなく読んで知っているつもり漢字でも、いざテストでカタカナに表記されると字形が浮かんでこない経験は多くの人がしているにちがいない。読める字より書ける字のほうが誰しも少ない。私案だが、私の場合こういう工夫をしているので紹介しよう。

まず、カタカナの部分に漢字の字数に分解する。品詞分解のようにである。たとえば、(ア)は「ケン」と「メイ」に、(イ)は「ヒ」と「ヤク」に、(ウ)は「ホウ」と「カツ」にといったふうである。そして、それぞれの漢字が音読みか訓読みかに分け、熟語の構成を考えてゆくのである。この際、前後の文脈から字の意味を訓で推定してみる。(ア)の「バスに乗り遅れまいと」に走っている」の場合は、「〜」の部分で「いのちがけで」と読んで、ケンメイのメイを「命」と決め、ケンを「かける」の意をあらわす漢字の中から「ケン」という音をも合わせ持つ漢字を取り出してくる。すると「懸」の字が浮かび、熟語が書けるといふやりかたである。同様の方法で他の漢字についてもやっていたきたい。(イ)「ヒヤク」の「ヒ」は「比」ではない。「身体の届く範囲を超え」るわけだから、「くらべる」ではなく、「とぶ」。「ヤク」は「はねる」意なので足偏「疋」を使うはず。(ウ)「ホウカツ」は「『人生全体』といった」的」という文脈だから、「つつむ」の「ホウ」と「ひとつにする」の「カツ」。カツは動作だから手偏になる。(エ)や(オ)については自分でやってみてほしい。こういう訓練は、自分でやって法則性を発見することに意義があるのだから。なお、このやりかたも、やりすぎではいけない。熟語が正しく浮んで書ける状態のときは使用する必要がない。私たちは多くの場合、記憶している文字や言葉を自然に（無意識に）使っているのだから。あくまで補助的な方法の一つと考えてほしい。

問2 接続詞を空所に補充する問題。このような問題では、個々の接続詞の機能を正確に把握することと、補入する箇所の前後の論理

関係を明らかにすることの両面が重要である。まず、接続詞の機能を確認しておきたい。

- a ところで…話題をかえるときに使う語。それはそれとして。さて。
- b だが…前文とあいれない意の後文の文頭におく語。逆説関係を示す。しかし。けれども。
- c だから…前に述べたことを原因・理由として述べる文の文頭におく語。そういうわけで。それゆえ。

次に、補入箇所の前後関係を検討してみよう。

①の場合。空欄の前に「意味や目的の意識」とはどういうことなのかの説明がある。本文冒頭の「『意味』とか『目的』とか」

のために』という観念は、時に発生する。」に続いて、バスに乗り遅れまいと懸命に走っている人、また間に合って喜ぶ時といった具体例を挿入して、「このように、意味や目的の意識とは、ある行動や表現の外側に出て、それらをその終局点の見地から対象化し、他の行動や表現に関連づけることである。」と述べてまとめ、「意味や目的の意識とはどういうことなのか」の説明に終始していることが確認できる。一方、空欄①の後は「人間は、自己意識を極端に発達させた動物である。」にはじまり、「自分の行動や表現にまつわる獲得してしまった。」と続く。この続く部分は直前の一文より詳しく説明したものである。それに続いて「この場合に即して言い換えると、人間は、『意味』や『目的』の意識それ自体を独立して心の対象として扱うことを覚えてしまった。」と続く。「この場合に即して…」とは、「意味や目的の意識に即して」ということであり、「人間は、自己意識を極端に発達させた動物である」を「意味や目的の意識に即して」説明したことになる。すると、「(①) 人間は、自己意識を極端に発達させた動物である。獲得してしまった。」までが、一つのまとまった意味の単位をなすことがわかる。こう考えてくると、空欄①に入りえないもの、「c だから」が明らかにになる。残る「a ところで」「b だが」は、挿入された一つのまとまった意味の単位の冒頭にくる語としての役割を持つため、この段階では保留しておく。

③の場合、空欄の前に、「このように、人生の個々の断面や場面の意味や目的は、人生の内部にだけあってその外に出ることができない。」「したがって人生全体をその外側の何かに関連づけるような、そういう他の『何か』などは存在することができない。」とある。空欄の後には「人生そのものに『意味』や『目的』などを求めるのはもともと無理なのであり、」と断定し、すぐに続けて「要するに人生には『意味』も『目的』もありはしないのである。」とさらに断定する。断定表現は直後の文にも用いられ、この段落最後の一文「この事実は論理的には絶対否定できない。」と強くまとめられる。そこで空欄③の前に書かれていた内容と関連づけるならば、前に述べたことを原因・理由とし、結論を断定的に述べる際に用いる。「c だから」がふさわしいことが明らかである。

④の場合、空欄の前に「『人は何のために生きるのか』という問いは、論理的にはけっして答えることのできない問いであって、別の形に編み換えられなくてはならない。」とある。これは、文章のはじめから論じてきたテーマの一つの結論といえる。したがって、内容上の大きな切れ目であるともいえる。空欄の後に「ある行動や表現に意味や目的を問う意識は、次々にその連鎖をたどってゆけば、必ず、自分自身が充足した生を送るため」という究極地点に帰着する。」とある。次の次の形式段落においても、「『ある行動や表現の目的は自分自身の生の充足のためである』という答えは究極的…」と断じている。つまり、空欄④の直前にあった

「別の形に編み換える」とは、「どうすれば人は自身の生を充足させてくれる意味や目的を作り出すことができるか」という形であり、論理的に行き詰ってしまった地点から方向を変えて考えたということである。そこで、話題をかえたい時に用いられる「a」ところで」が、この空欄④を埋めるのに最適であることがわかるだろう。

設問文には、同一の語を一回しか使用できないという制約があるので、空欄①は消去法を用いて「a」ところで」を消し、「b」だが」を正解とする。

問3 ことばの意味説明の問題。

(1) 刹那……仏教語。梵語を音写したもので漢字そのものに意味はない。極めて短い時間のことで一説によれば指で弾く短い時間

のあいだに六五刹那あるという。対義語に「劫」がある。劫とは、きわめて長い時間の単位のこと、多くは宇宙の生成減などについていう。「未来永劫」などと用いる。これももともと仏教語。

(2) シニシズム……一般に、世論・習俗・通常の道徳などを無視し、万事にわたって冷笑的に振舞う態度。犬儒主義、冷笑主義。シニスムともいう。

(3) ニヒリズム……真理や道徳的価値の客観的根拠を認めない立場。虚無主義。この立場の人間には、無意味な生存に安住する逃避的な傾向と、既成の文化や制度を破壊しようとする反抗的な傾向とがある。もともとは、ツルゲーネフが小説『父と子』の中で既成の秩序・価値を否定する主人公をニヒリストと呼んだことに由来する。

(4) 大乘的……もとは仏教語。「大乘」とは文字通り、大きな乗物のこと。大局的な見地に立つという意味で、「大乘的な見地」と用いられる。目先のことにとらわれず、個人的な利害はおろか、家族や地域、国などの立場を超えたもつと大きな立場という意味である。

問4 傍線部の内容の直接的な原因に相当する部分を本文中から抜き出す問題。このような問題は、傍線部の内容を明確にすることから

は始めるべきである。傍線部Aに「そのつどの行動や表現をそのつどの意味や目的によってつなぎ合わせた連鎖の体系であるはずの『人生全体』の観念に、人は意味や目的の観念を適用しようとしてしまったのだ」とある。これは「『人生』とは、個々の行

動や表現の集積の全体である。意味や目的は、個々の行動や表現に対応している。にもかかわらず、なぜ人間は、『人生全体』に對して『意味や目的』を見いだそうとするようになったのか、ということであろう。すると「人間はくだから。」という対応關係が理由説明の形式の必然性としてみえてくるだろう。人間が、ともかく動物的な状態から抜け出した状態を人間と規定するならば、まさしく人間は、「考える葦」であろう。本文に、人間は「自己意識を極端に發達させた動物」と述べた部分があった。極端な表現である。ここを「十五字以内」に合わせて抜き出せば正解。

問5 語の空所補充問題。選択肢がなく、自分で文脈から最適の語を考えて入れるタイプである。空欄②は二箇所ある。一つは「人生

の終局点」が(②)であることを人間は知ってしまった」であり、ひき続いて「のであるから、人生全体の意味や目的は(②)に他ならないということになりかねない。」である。「人生の終局点」とは何か、「人生全体の意味や目的は」という考えかたを推し進めていくと、「に他ならないということになりかねない」つまり、とんでもなく単純かつ無意味な結論で終わってしまうというのである。これは形式段落でいうと三つ後の段落にある「シニズムやニヒリズム」に通じる内容である。人生の終りを人は「死」とよぶ。人生全体の意味や目的が「死」だなんて、とんでもないことになる。したがって正解は「死」である。このような問題の場合、二つの空欄のいずれにおいても該当するかどうか確かめなくてはならない。

問6 指定された形式による説明問題。傍線部B「人は何のために生きるのか」という問いは、論理的にはけっして答えることのできない問いであって、別の形に編み換えられなくてはならない」とらえて「別の形」とは具体的にどんな形なのかを考えなければならぬ。ここで問2の解説(空欄④の補充の項)を読み直してほしい。「別の形に編み換え」とは、「どうすれば人は自身の生を充足させてくれる意味や目的を作り出すことができるか」という問いの形であり、こうした転換は、空欄④の直後の一文に示されている。また、本文全体の最後の一文の中にも「人はいかにすれば自分の生を充足させることができるのか」と書かれている。この二箇所を参考にして、表現を工夫し字数を整えればよいだろう。

参考問題

【問題】（演習）京大・難関国公立大対応問題

出典：岡松和夫『人間の火』／千葉大学 文・法経学部 00年

文章略解

「土郎」の母は二度結婚に失敗しており、祖母方の親戚での評判は悪かった。最初は「土郎」の父と、双方の親の反対を押し切って結婚したが、まもなく彼は結核で死んでしまった。彼の実家とは疎遠になったが、叔父が間を取り持ってくれた。その後彼女は「土郎」を祖母の元において市役所の男と再婚したが、一年で終わった。現在「土郎」は中学二年、母は家政婦になろうと思っていたが祖母の反対にあい、遠縁の経営する商店に勤めていた。

解答

問1 アⅡひつぎ

イⅡつぶや

ウⅡかさく

エⅡかわせ

オⅡふすま

問2 中学二年（25行目）

問3 親の反対を押し切って結婚した夫婦の間に生まれた土郎の存在は、祖父母にとっては不愉快なものであったから。

〔51字・解答例〕

問4 既成の社会通念に囚われない、進歩的で自立した女性。〔25字・解答例〕

問5 母の再婚話の行方が気になって仕方がない気持ち。〔23字・解答例〕

問6 再婚話に際しては相手方の状況を吟味し、独りで働く場合にも、変な噂にならないように職種を吟味すること。〔50字・解答例〕

問7

母が再婚相手と二人で生活している様子をつぶさに見て、母の立場に配慮しなければならないと気付いたから。〔50字・解答例〕

参考問題

【問題】(自習)京大・難関国公立大対応問題

出典：佐々木健一『泰山にのぼる』／東京都立大学 人文・法・経済学部 00年

文章略解

中国では「文化が自然を聖化する」という。それは日本人の常識である「自然の聖性」とは正反対である。たとえば泰山でも、あちこちに祠や廟などの建造物があり、岩肌には至る所に碑文がある。しかもその建造物や碑文こそが、中国人の意識の中では意義あるものとして捉えられているのだ。中国人学生・W君の案内で泰山に登った「わたくし」は、彼の思う「見どころ」とのギャップに悩みながら、そうした中国文化の特性を痛感させられた。

解答

問1 (ア)∥標高 (イ)∥感銘 (ウ)∥輪郭 (エ)∥強(いる) (オ)∥痛烈

問2 b

問3 泰山が聖山であるのは、山頂付近に祠や廟などが並び、岩肌のいたるところに碑文が刻まれているからである〔49字・解答例〕

問4 何より強い違和感を覚えた〔12字〕(17行目)

問5 「W君」自身が中国の民俗の特長だと信じる、建造物や碑文にあふれる景観を「わたくし」に存分に見せることができたから。

〔57字・解答例〕

問6 ウ

問7 自然の洞窟に対して、数年の間に仏像を彫るという行為が有意義だと「W君」は信じている様子だったから。〔49字・解答例〕

問8 碑文や建造物の多い山の情景に触れて、文化が自然を聖化するという中国文化の本質をリアルに体験したこと。〔50字・解答例〕

解説

問2 口語文法に関する設問も、このように時折設けられることがある。口語文法は中学校の学習内容なので、その後に記憶が曖昧になっただけで、入試前に一度、主な事項をおさらいしておくことをおすすめする。

実際に設問に相対した場合に、この種の知識に自信のもてない場合も多かろう。現場での見きわめにおいては、①「他の言葉に置き換えてみる」、②「前後の語の品詞を検討してみる」というふうにやってみるとよい。教科書的な知識がパーフェクトでなくとも、この程度の選択式問題ならば何とか対処可能である（裏を返せば、その程度の力量しか出題者は要求していないのである）。ここでは、**a・c・d・e**の「で」がいずれも「であり」というふうに置き換え可能であるのに対して、**b**だけがそのような置き換えをすると文意が不自然になってしまうということに気づければ（前述の①）、これを「用法が違うもの」として選ぶことができる。教科書的な説明をするなら、**b**だけが格助詞の「で」（時間・場所等を示す）、他は断定の助動詞「だ」の連用形の「で」ということになる。なお、**c**の部分にある「もので」という語は、活用語の連体形に付属する接続助詞として捉えることも可能である（一部の辞書にはそのように記されている）。これは「くなので」というニュアンスの順接・因果関係を示す働きを持っており、**a・d・e**とはやや異なる用法である。しかしながら、これとても元々は名詞「もの」+断定の助動詞「だ」の連用形「で」が接続したものであり、**a・d・e**に近いものである。したがって、「用法の違うものを一つ」という設問の指示により沿うものとしては**b**と判断するのが妥当であろう。

問3 空欄補充においては、①空欄以外の部分の内容から空欄の内容を推測し、あわせて②空欄の前後の言葉と不自然でないようにつなげるようにする、という二つの点から考えていくとよい。

①の作業に際しては、空欄部分に説明を加えていたり、これと対比的な内容を述べていたりする部分を捜していけば、そこを手がかりとして考えていくことができる。ここではまず、この空欄が直前の「その言葉の意味」（16行目）、つまりは「中国では文化

が自然を聖化する」という言葉の意味であるということ、そして次の段落で「これとは逆の命題」として「泰山の聖性は自然に由来する」(23行目)と述べられていることに注目したい。ここから、この空欄に入れるべきは「泰山の聖性の由来」が「自然」ではなくて「人間の作ったもの」つまりは「文化」にある、という内容であることが推測できる(a)。

また、この空欄の直後に「山頂付近だけではない」(16行目)とあり、道の随所に「祠や堂のような建造物」や「碑文」があった、と述べられている点にも注目したい。ここから推せば、この空欄には「山頂付近」に「祠や堂のような建造物」や「碑文」があった、という内容があることがわかる(β)。

以上二点が踏まえられた内容の解答が導ければ①の点ではOK。

②に関しては、この空欄が《 》に括られた文であること、次段落にある「逆の命題」と対比されるものであることから、理由を述べる一つの完結した文にして、なおかつ文末には句点を付さないようにすればよからう(γ)。

$a \cdot \beta \cdot \gamma$ の三つが踏まえられていれば、出題者はその解答を減点対象にする根拠を持たないはずである。

問4 抜き書きの問題に際しては、出題者の発するメッセージ(設問の指示や傍線部分の付設)を吟味して、解答として抜き出す部分

が備えているべき具体的条件を抽出することを心がけられたい。問題文の他の部分に眼配りをして探す作業をはじめの前に、可能な限り多くの、具体的な条件を抽出することだ。

ここでは、この傍線部分Bが、前行の「この文化的景観」(21行目)つまりは泰山にある碑文に対するものであること(①)、そしてなおかつその景観に悪感情を表しているものであること(②)、の二点ぐらいは少なくとも踏まえたい。その上で、「十五字以内」という指示に従って問題文の他の部分を探していくのだ。そうすれば、「碑文」に対する悪感情を端的に述べた部分が同じ段落の前半に見出せよう。設問の指示に「同じような内容」とあって、「同じ内容」と述べられていないことから、まったく同趣の表現ではないことも推測できよう。

問5 傍線部分に言う「W君」の「満足」の具体的な内容を説明することがここでの作業課題となろう。

この傍線部分は、「しかし」という逆接の接続詞に導かれている。直前で「格別歩いて下りる意味があるようには思われない」(43行目)という、筆者(佐々木)の述懐が述べられていることとの関係で考えれば、ここでの「W君」の満足とは、筆者(佐々木)

を歩いて下山させたことに因むものとわかる。

では、彼が筆者（佐々木）を歩いて下山させた意図は何か。前段落の記述によれば、「途中には民俗的な場所がいろいろあるから」（37行目）ということになる。そしてその「民俗的な場所」とは、「散在する建造物と岩壁の碑文」（42行目）であろうとされている。ここから考えれば、この「W君」の「満足」とは、筆者（佐々木）が「わたくし」に対して、彼自身が「民俗的」だと信じているところの「建造物」「碑文」を道すがらふんだんに見せることができたことによるものだとわかる。この点が踏まえられた解答ならば基本的にOK。

問6 この「洞窟」についての問題文の記述を追っていくことから解答は絞り込める。傍線部分の前で「かれの念頭にあったのは、この山の中腹にある洞窟で」（50～51行目）と述べられているところにまずは注目。この「念頭にあった」というのは「W君」が「見どころ」として考えているという意味である。そしてその「W君」とは、筆者（佐々木）を案内する立場にある人間である。だとすれば、ここでの「かれの執心」とは、彼が筆者（佐々木）に是非見せたいと思っている見どころ、という意味に解するのが妥当であろう。選択肢の中でこのニュアンスを忠実に踏まえているのはウ。イは近いが、これだと「W君」自身が見たいと思っているという意味になってしまい、やや外れる。エの「信仰」に関わる具体的な記述はこの部分には述べられていないのでこれはさ拉的な外れ。アは「通う」という行動の話であり、傍線部分に言う「執心」つまりは心の上でのこだわり、ということに合わない。

問7 この傍線部に言う「呆気に取られた」の内容については、続く記述の中で説明されている。「W君」が「数年前ここに来たときには仏像はなかった」のに、洞窟内に新たに仏像を作ったことを「有意義」だと述べていることが、筆者（佐々木）には驚きだったのである。このことの性質を抽出する形で、わずか数年という短い期間に自然の洞窟に手を加え、なおかつそれを「有意義」と見なしていることが筆者（佐々木）の想像の埒外であったという事情を説明すれば解答の核はできよう。

問8 傍線部分直前にある「そう考えた」というのは、「中国人の意識を支配しているのは断然《文化の聖化》のほう」（28～29行目）を指している。つまり、ここでいう「この二日間の経験」の意味とは、「中国人の意識」には「自然の聖化」ということがあるということを知った、という点に求められよう。このことを軸にして解答を書いていけばよい。この部分の文脈から外れて、「日本

人と中国人の感じ方の違い」などとしてしまうと、焦点のぼやけた解答しか書けないことになってしまう。

ここで筆者（佐々木）が学んだ中国文化の本質Ⅱ《文化の聖化》とは、具体的には「W君」に案内されていった登山道（下山道）の、建造物や碑文にあふれた情景を眼にしたことを契機にして獲得された認識である。要求された字数の範囲内で、この点も補うとよい。

